

ナメクジウオ1万4千個体を有明海に放流しました

有明海は日本有数のナメクジウオの生息地ですが、個体数は減少傾向にあります。原因のひとつは海底の泥化で、生後間もない個体が特に影響を受けているようです。



センターではナメクジウオの個体数減少に歯止めをかけるため、広島大学臨海実験所で安井教授らが人工増殖したナメクジウオ1万4千個体を、2008年12月1日に天草市有明町赤崎沖で放流しました。放流したのは、赤崎沖で採集した成体を広島大学で飼育・増殖させ、体長8mm前後に育てた生後3ヵ月半のものです(写真上)。海面に放すと魚に食べられてしまうため、当日はナメクジウオを容器に入れ、広島大学の浦田助教と熊本大学院生の野島君が水深16mまで潜水し、海底まで運んで放しました(写真下)。

今後は放流を継続すると共に、生息地の保全にも取り組みたいと考えています。



ハマグリ資源管理に関するリーフレットが完成しました

センターでは2005年より「熊本県ハマグリ資源管理研究プロジェクト」(代表:内野センター長)を立ち上げ、ハマグリの資源管理とブランド化に関する研究を行っています。このほど成果の一部として、ハマグリの資源管理に関する実効的な提言をまとめたリーフレット「肥後ハマグリの資源管理」を作成しました。

移動能力の乏しい水産資源は、厳格な管理を行うことで持続的な漁獲が可能となり、漁獲総量も増加することが見込まれます。しかし、近年の漁具漁法の性能向上と流通の近代化により、「根こそぎ採り、遠隔地に高く売る漁業」が行われている漁場が少なくありません。

熊本県も例外ではありません。熊本県はハマグリ生産量日本一の県ですが、このことは地元でもあまりよく知られていません。また、漁獲に関する規制がほとんどなく、多くの漁場でハマグリが乱獲されています。熊本県におけるハマグリの漁獲量は、過去20年間で約20分の1に減少しています。

今後、このリーフレットを漁業者や講演会の参加者、関係機関などに配布し、ハマグリの資源量回復と漁獲増加に役立てたいと思います。

